京都橘大学
地域政策・社会連携推進センター

つながる Vol. 1

つながる

01

CONTENTS

巻頭言
ごあいさつ
杉山 泰 本学現代ビジネス学部教授、
地域政策・社会連携推進センター長

Management & Design 1
現代の地域政策を推進し、
京都橘の文化的伝統を今に
—まちづくりは、人づくりから—
池上 惇 京都橘大学名誉教授、
元・京都橘大学大学院文化政策学研究科長

Interface 実践の知 第1回－I
山科の子どもたちのきずなを深める事業を推進する
げんKids★応援隊
川田 奈穂 本学人間発達学部3回生
倉持 祐二 本学人間発達学部准教授

Interface 実践の知 第1回－II
清水焼の郷まつりにおける学生主体の来場者調査
岡本 哲弥 本学現代ビジネス学部准教授

京都モダニズム建築を訪ねて 第11回
清六陶苑 本社
河野 良平 本学現代ビジネス学部准教授

Interview ともに 第1回
学生の発想×プロフェッショナルの技＝新スイーツ
「山科ぶどうタルト」誕生！
若者と老舗のコラボレーションで、山科の魅力を発信する
亀丸 秀之 「スイス菓子 ローヌ」オーナー、
オーストリアウィーン国家マイスター、
ドイツ国家マイスター

ごあいさつ

杉山 泰 Sugiyama, Yasushi
本学現代ビジネス学部教授、地域政策・社会連携推進センター長

2000年4月に「地域政策・社会連携推進センター」の前身となる「文化政策研究センター」が開設され、2001年4月に「文化政策学部」がスタートしました。100年近い京都での女子教育の伝統を守るためには、文学部の充実と同時に、社会系の学部開設に向かって全力を尽くさなくてはいけない、という門脇禎二学長をはじめ、全教職員の強い思いがあった、と記憶しています。19年も英語英文学科で英文学と翻訳を教えていた私に、新学部への移籍の依頼があったとき、正直言って複雑な心境でしたが、全学一致で新しい社会系学部の新設を決定していたので、引き受けました。2001年に、学術情報部長として「文化によるまちづくり」の講演会の企画と学園創立100周年を祝う出版事業に力を注ぎました。また女子バレーボール部の部長を引き受けていたため、女子バレーボール部の強化に努め、2001年の秋、わずか11名で1部昇格を果たしました。100周年前夜を飾る出来事として、新学部開設のための記念講演会の開催と女子バレーボール部1部昇格は私の脳裏に焼きついています。

それから10年ほどたった2012年の現在、文学部単科の学生数1000名ほどの小さな女子大学が、3000名を超える5学部を擁する男女共学の総合大学になっています。文化政策学部10年の歩み、特に文化政策研究センターの10年間の活動は文化政策研究センター発刊の『ニューズレター』40号で簡単にまとめられているし、さらに織田直文前センター長による総括文書が出版されています（『文化政策研究センター研究プロジェクト報告集』、2012年4月）。これまで出版されてきた40号までの『ニューズレター』も2巻の合本として作成しています。興味ある方はぜひご覧ください。日本全国での「文化政策の現場」も紹介されています。

本学は2005年看護学部新設と同時に男女共学化し、さらに人間発達学部、健康科学部という新学部を新設しました。文化政策学部も2005年「現代マネジメント学科」を加え、2008年には「現代ビジネス学部」と名称変更しました。これまでの「文化によるまちづくり」という基本理念を生かしながら、実際に1級建築士養成をも目指す「都市環境デザイン学科」も立ち上げました。そうした中で、『ニューズレター』を40号まで創り上げてきた「文化政策研究センター」も、総合大学化した京都橘大学全体を包括しつつ、さらなる発展を願って「地域政策・社会連携推進センター」と名称変更し、新たなスタートをきることになりました。その第1号が、今回の『つながる』になります。10年前に着任さ

れた若い先生方の１人、展示学を専門にしている木下達文准教授による「山科ぶどうタルト」の実践報告は、学生と地元のぶどう農家とケーキ専門店ローヌとのコラボレーションです。地域を生かし、いかに社会連携を図っていくのか、という地域政策・社会連携推進センターが目指している「文化によるまちおこし」の１つの事例と言えます。

また、６名の１級建築士の先生方による地域のまちなみ再発見、価値ある建築の再発見も続けていく予定です。その１例が、本誌にも収録している河野良平准教授の「京都モダニズム建築を訪ねて」です。さらには、社会連携として、龍谷大学を中心に京都の９の大学で連携して、文部科学省の補助金を獲得した「地域公共政策士」の資格取得に向けてのカリキュラム改革も進行中であり、京都市、京都府との地域政策連携強化も進めています。

本学では開学110周年を祝って健康科学部と中央体育館を新設したことに伴い、小・中学校の子どもたちのみならず、スポーツを愛する皆さんに、「バレーボール・クリニック」といった社会連携活動も提供していくことが可能になりました。健康科学部の中の理学療法士の資格を持つスポーツトレーニング担当の先生方、さらには救急救命コースの先生方や学生の協力を得ての「命を守るクリニック」なども展開していけそうです。

2012年度京都市補助金交付事業（「山科“きずな”支援事業」）に、山科地域の子どもたちの登下校を見守る「京都子ども守り隊・守るんジャー」、げんKids★応援隊による「山科の子どもたちのきずなを深める事業」、救急救命研究会TURFによる「広げよう！防災意欲と地域の絆」の３つが京都橘大学から採択されました。２つが人間発達学部、１つが現代マネジメント学科救急救命コースの学生がかかわっています。また、都市環境デザイン学科の学生を中心に盛り上がってきた「やましな駅前陶灯路」も、今年で５回を重ね、この事業にも山科“きずな”支援事業の補助金交付がなされています。学生を中心にして地道に行なってきた地域連携運動が着実に根づいてきていることの証拠の１つと言えます。山科地区で実践してきた「産公民学際連携による地域再生に関する研究」がようやく実ってきたということもできます。

京都橘大学が山科にあってよかった、と学生だけでなく、地域住民の皆さんに言ってもらえる大学づくりを当センターは追求していきます。これからもご支援のほど、なにとぞよろしくお願いします。

現代の地域政策を推進し、京都橘の文化的伝統を今に
—まちづくりは、人づくりから—

池上 惇 Ikegami, Jun
京都橘大学名誉教授、元・京都橘大学大学院文化政策学研究科長

「山科の産業とコミュニティ再生の‘核’として、センターを発展させ、成果を世界に発信し、京都橘へ人の流れを創りだそう。」
これが、私の願いです。

京都橘の地域づくり活動における先駆性

京都橘における地域とのかかわりは、文化政策学部が新設されるまでは、文学部歴史学科の先生方が担ってこられました。山科の文化や歴史の研究は、当時の歴史学研究においても、非常に価値の高いもので、洛中の文化に対して独自のものを確立しており、一読して、驚いたことを記憶しております。

西暦、2000年のはじめに、文化政策学部が発足してから、これらの成果を継承し、織田直文先生、木下達文先生らが中心となられ、いま、学部長の小暮先生の独自の企画などとともに、新たな歩みが始まりました。

京都橘の推進する、山科まちづくりは、当時の商店街や職人の団地などとの連携、NPO・自治体とのコラボレーション、地域における文化財の発見、芸術文化の創造と振興などを原点にして、京都や日本、さらには、国際的な交流にまで、大きな足跡を残しました。

現在では、学部学生・大学院生が教師とともに、まちづくりを推進し、産業界やNPO、行政の方々と連携して、商品開発から、賑わいの創出、文化財の発掘にいたるまで、多くの事績を残すこと。また、歴史的人物の文脈をたどり、研究し、出版する、などのことは、当たり前ですが、当時は、まさに、先駆的な試みで、各大学の地域実践に与えた影響は、はかり知れません。また、各地の学生によるまちづくり実践の交流も、年に一度、試みられました。盛況が続き感動しました。国際交流は逗子の国際交流センターで、D. スロスビー先生など、一流人を招いて行なっていました。

これらの実績は、文部科学省における、教育実践の位置づけにおいても、高い評価を得てこられています。

さらに、学生たちは、夏休みに、「故郷レポート」を作成し、各地、固有の文化を生かした地域の動きを伝えてくれました。非常に質の高いもので、いまでも、通用する、立派なものが多かったと、思います。

教師は、土曜や日曜を活かして、京の町中や郊外の散策会を持ち、多くの学生は他大学の友人を伴って参加してくれました。有難いことでした。

これらの実績によって、京都橘の教育研究における名声は非常に上がりました。この実績を活かして、厳しい少子高齢化の波ながら、人の流れが永続的に京都橘に向かうことを願っております。

これからの課題
—ひとづくりを通じた、まちづくりを—

私は、いまも、各地を調査しながら、社会人教育の推進者として「文化による‘まちづくり’‘村づくり’」の

& Design 01

池上 惇
1933 年大阪市生れ。京都大学経済学部卒。博士（経済学）。
京都大学名誉教授・福井県立大学名誉教授・京都橘大学名誉教授。
働きつつ学び地域を研究する社会人大学院教育の専門家。各大学で文化政策学などの研究科・専攻を開設。
現在、市民大学院（京都）の世話人代表。人材を育成しながら通信制社会人文化政策大学院を申請。
教育研究の功績で瑞宝中綬賞を受章。
主著『文化と固有価値の経済学』岩波書店、『文化と固有価値のまちづくり』水曜社。

研究教育の実践を重ねております。

このなかで、京都橘の先生方、卒業生や在校生にお世話になることも多く、とくに、アーツ・マネージャーの領域では、本学の文化政策学研究科で修士号を取得された各位のご活躍が目立ちます。博士論文の出版も多く、博士号を取得されて大学教員となられた方もあり、すばらしい実績です。

京都橘の文化政策学教育は、学部名称の変更など変遷はありますが、常に、まちづくり・村づくりの現場に根差し、国際的な交流を背景に、高い理論水準を維持してこられました。先生方と学生諸君の御精励に頭が下がります。

いま、私は、大学組織を離れましたから、自由な研究教育活動ができる立場にあります。

この立場を活かして、京都橘の文化的な伝統を開花させようと精いっぱいの努力を重ねてきました。幸い、京都橘女子大学文化政策学部創設のとき、ご支援いただきました、資生堂名誉会長の福原義春先生、元、文化庁長官の植木浩先生からご支援を賜り、心から感謝いたしております。

京都市のご支援で立派な学舎（歴史的建築物・室町の方々のご寄付による）をご提供いただき、市民大学院を四条烏丸近くで、無料で、研究教育を実践する奉仕活動をはじめました。入学者には、学会活動（国際文化政策研究教育学会・入会金１万円、年会費１万円、現在、約 200 人）にご参加いただき、研究報告や学会誌へのご執筆をお願いしています。現在は通学制で、毎年、20 人近くの修士学位相当の人材育成を目指しています。

いま、開校後、1 年半ですが、すでに、驚くほど質の高い論文が出てきます。

来年からは、通信制も開学して、全国ネットワークへと発展させます。5 年計画で、5 千人規模を目指します。各地に人材が育ちましたので、きっと、支えて下さるでしょう。

教師陣は、京大の名誉教授など、自然・人文・社会の超一流の方々、実績と研究志向をもつ経営者各位などで、‘現場に根差した、高度学術’を合言葉に、「文化による‘まちづくり’‘村づくり’」を目指す社会人が、交流と研究の場を活かしておられます。

そして、研究の力量を身につけられますと、自分の故郷における地域再生を目指して、自分で、ネットワークを構築され、再生の構想を打ち出し、産・官・学の連携を目指して活動されます。素晴らしいと思いました。

この経験から、本センターにおかれましても、山科を軸に、本学関係者のネットワークを構築され、文化政策学研究科と連携されて、よき「まちづくり人材」を育成され、その層を厚くして行かれますと、自ずから、よい山科、よき大学が実現してゆくのではないかと感じております。

「まちづくり」は「ひとづくり」から。これが地域連携の基軸ではないでしょうか。

本学の益々のご発展を願いつつ。

山科の子どもたちのきずなを深める事業を推進する

げんKids★応援隊

代表

川田 奈穂　Kawada, Naho

本学人間発達学部３回生

担当

倉持 祐二　Kuramochi, Yuji

本学人間発達学部准教授

げんKids★応援隊は、京都橘大学人間発達学部児童教育学会に加盟するボランティア団体です。2008年２月に結成し、同年４月に活動をスタートさせました。活動も今年で４年目になります。

げんKids★応援隊の活動には、３つの意義があります。

１つめは、子どもたちの経験を豊かにすることです。今の子どもたちの現状をみると、さまざまな年代の子どもたち相互の交流が少なくなっているように思います。だからこそ、いっしょに体を動かしたり、モノづくりをしたり、自然に触れ合う体験をして、より多くの仲間とのつながりをつくり出すことをめざしています。その結果、子どもたちの新たな成長につながればと願っています。

２つめは、「子どもたちといっしょに何かしたい」「教育・保育の営みを実践的に学びたい」という自分たちの考えを形にして実現することができることです。げんKids★応援隊の活動は、誰もが企画を立ち上げ実行できます。活動を通して、子どもたちの成長を肌で感じ、自分たちも成長できればと考えています。

３つめは、地域の中で安心して子どもを活動させる場をつくりだすことです。特に、保護者が安心して子どもを預けることのできる場をつくりあげたいと思っています。また、子ども、大人、地域の人たち、学生がつながり合う場を設定し、交流をしながら地域振興の力を生み出していくこともねらっています。

山科区中在家町内会の地蔵盆

げんKids★応援隊の活動の内容は大きく分けて３つあります。“人形劇団ぽんぽこ”による人形劇、“劇団ARASHI”による絵本「あらしのよるに」（木村裕一著）の公演、工作やさまざまな遊びを行な

う“体験遊び”です。また、地域の人たちといっしょに、地域子育て支援のイベントにも参加しています。活動場所は、基本的には京都橘大学の構内ですが、地域や各施設から劇の依頼や遊びコーナーの依頼があった場合は地域に出かけて活動しています。企画を考えるたびに、大学周辺の小学校や児童館に活動を知らせるチラシを配って広報活動をしています。

現在、げん Kids ★応援隊のメンバーは、1～4回生を合わせて28名います。代表・副代表・会計・事務の4役が組織の中心的な役割を担っています。2012年度は次のような活動にとりくんできました。

4月　げん Kids ★科学あそびの広場（京都橘大学児優館3F　理科実験室）
5月　秘密基地・巨大積み木づくり（京都橘大学大アリーナ）
6月　水鉄砲であそぼう（京都橘大学グランド）
7月　勧修小学校　学内キャンプ＆夏祭り
8月　山科地域の地蔵盆での劇・あそびコーナー

“体験あそび”に参加した子どもたちからは、「いろんなゲームがあって面白かった」「楽しかった。また行きたい」と好評でした。また、参加した保護者からも、「なかなか楽しい企画でよかったと思います。これからも地域の人たちと連携して楽しいイベントを企画していただければと思います」と賛同の声をいただいています。

子どもたちとの手あそび

ペープサートによる劇

8月19日（日）には、山科区中在家町内会主催の地蔵盆が京都刑務所南東角の公園でありました。げん Kids ★応援隊は、午後1時から40分の時間を使って、8名で「ねずみくん　大きくなったらなにになる」の劇とあそびコーナーを行ないました。

「ねずみくん　大きくなったらなにになる」の劇は、2週間にわたって準備をしました。まずは台本づくりからです。大学の図書館で子どもたちが喜ぶような絵本さがしをしました。絵本を選んだあと、内容が少なかったので、内容をふくらませるために新たなストーリーをつくりました。台本ができあがると、登場人物に合わせたペープサートや背景などをつくりました。準備物ができあがると、劇の練習です。毎日のように練習を積み重ねていきました。地蔵盆での劇の公演の依頼が毎年くるたびに、新たに劇の台本をつくり、自分たちも楽しみながらとりくんでいます。

2012年度のげん Kids ★応援隊の活動は、山科“きずな”支援事業補助金の交付を受けて行なっています。今後は、①劇団 ARASHI や人形劇団ぽんぽこの公演、②山科醍醐こどものひろば「子どもフェスタ」でのイベント、③クリスマス会、④げん Kids ★スペシャルイベントなどを考えています。山科地域の子どもたちの笑顔がいっぱいに広がる活動を今後も続けていければいいなあと思っています。

清水焼の郷まつりにおける学生主体の来場者調査

岡本 哲弥　Okamoto, Tetsuya
本学現代ビジネス学部准教授

京都市山科区にある清水焼団地では、7月になると「陶器まつり」が開催されるのが恒例となっていたが、2011年からは日程や内容が大幅にリニューアルされ、それに合わせて名称も「清水焼の郷まつり（第37回大陶器市）」へ変更になった。その実施に向けて、実行委員会から昨年7月末に、「清水焼の郷まつりで、来場者から率直な意見や評価を得て、それを翌年以降の企画に活かせるような調査ができないだろうか」という相談があった。この時に、清水焼の郷まつりの概要や期間などを確認したものの、正直言うと、調査企画、実地調査、データ分析が果たしてできるのだろうかと躊躇する気持ちが私の中にあった。とくに、調査向け予算があるわけでもなく、また調査員が確保されているわけでもない。そして、大学も夏季休暇に既に入っている。

こうした状況の中で、私は後期の基礎演習（ゼミ形式の授業）を調査プロジェクトとして位置づけ、授業の一環として学生とともに調査を実施することを決心した。しかし、課題はある。まず、後期の授業が始まってからでは、調査票（アンケート用紙）の作成は間に合わない。そのため、調査票は、実行委員会メンバーとの打合せとメールのやり取りを通じて、夏季休暇期間中に私が対応することにした。しかし、何よりも受講生にしてみれば、来場者調査プロジェクトのメンバーになっていることなど寝耳に水である。特に、実地調査は、イベントの開催される2011年10月14日（金）から16日（日）の日程に合わせて、学生が調査員として週末の休日を潰して現地で実施しなければならないのである。そこで、後期の授業が始まってすぐに、清水焼団地協同組合事務長の臼谷保夫氏に、基礎演習にお越し頂き、清水焼のこと、清水焼の郷まつりのこと、来場者調査の意義などを一から学生たちに直接説明して頂く機会を設けた。その上で、学生には調査期間の3日間中必ず1日は調査員を担当させるという強引なスケジュール調整を行ない、なんとか実地調査体制を整えることができたのである。

いよいよ実地調査である。初日の金曜日は、授業終了後の5時からシャトルバスと京阪バスの発着場を中心に調査を開始した。しかし、この日はあいにくの雨で客足も鈍かった。それでも終了時間の8時までの間に、37票のアンケートを回収した。2日目以降は天候には恵まれた。15日は10時から20時、最終日16日は10時から18時に、来場者に調査協力を呼びかけ、アンケートの回収を積み重ねていった。初日同様に、バス発着場を拠点にしながらも、バスの出発時間以外には、清水焼団地の各種イベント会場を駆け回ったり、道行く人に積極的にアンケートを依頼したりする学生の姿があった。その結果、15日には157票、16日には237票を積み上げ、最終的に、合計431件の調査票を回収することができた。

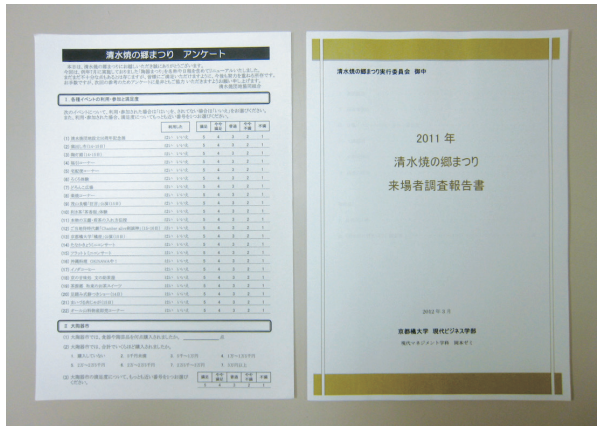
実地調査の様子

次にデータ入力と分析が待っている。この段階は、授業時間を使って進めた。データ入力は全員で手分けしながら、431 件の貴重なデータを 1 件 1 件入力した。問題はデータ分析である。今回の調査プロジェクトのメンバーは、現代ビジネス学部現代マネジメント学科で新しく岡本ゼミに配属された 2 回生である。つまり、データ分析など授業でも受けたことのない者がほとんどである。そんな中でも新しい分析用ソフトの利用方法の習得、実際のデータの分析、分析結果に対するコメントの作成などを、まさに OJT（On the Job Training）を通じて、進めていったのである。最終回の授業まで掛かって、なんとか分析結果を「2011 年清水焼の郷まつり来場者調査報告書」として、全員で取りまとめることができた。その報告書の中には、私が中心に作成した調査票への学生たちの厳しい指摘も含まれていた。この報告書は、今年の 3 月に清水焼実行委員会のメンバーに無事お渡しし、来場者調査の分析結果をフィードバックすることができた。

ちょうどこの新しい機関紙『つながる』が発行されるときには、今年の清水焼郷まつりが終わっている頃である。学生たちが作成した報告書が少しでも活かされ、昨年よりも来場者が増えて成功裡に清水焼の郷まつりが終えられていることを期待する次第である。

私自身、本プロジェクトを通じて、あらためて学生たちのパワーを感じることができた。それは、個々の学生の能力を超えて、チームで目標に向かう推進力である。最後に、本プロジェクト・メンバーとして、実地調査、データ分析および報告書の執筆に協力してくれた学生たちの名前を挙げさせて頂く。

今井穂波、宇納くるみ、大谷優一、壁田奈々、川瀬里奈、川部朋代、坂本香代子、下水木友香、冨岡勇輝、中井梨乃、野村響、早藤千紘、久山莉穂、福原茉莉、松岡愛、山本佳奈、八幡真ゆり、以上 17 名である。



アンケート用紙と報告書

京都モダニズム建築を訪ねて　第11回＊

＊文化政策研究センター広報誌『News Letter』からの連載回数を引き継いでいる

清六陶苑 本社

河野 良平　Kohno, Ryohei

本学現代ビジネス学部准教授

写真１：五条通りから建物の北西側を見る。
（写真：筆者撮影）

今回紹介する建物は「清六陶苑 本社」（1969 設計）である。設計者は七代清水六兵衛（1922 ～ 2006）である。清水六兵衛（きよみずろくべえ）と言えば日本を代表する陶芸家であるが、七代清水六兵衛は、驚いたことに建築の実務を経験したことのある人物であった。それだけでなく、七代目の人生は、まさに波瀾万丈という言葉が相応しいように思われる。1922（大正 11）年、愛知県名古屋市に生まれる。もともと持病を抱え、戦時中という状況や美術にも関心があったことから、地元の名古屋高等工業学校建築学科（現・名古屋工業大学）に入学する。1942 年、20 歳で繰り上げ卒業し、入隊。1944 年に沖縄へ送られ、座間味島や周辺の小島を転戦し、沖縄に戻って終戦を迎えた。戦後は大成建設で 3 ヶ月程実務を経験するが、勉強し直すため上京し、紆余曲折を経て 1949 年に東京芸術大学工芸科鋳金専攻に入学する。1950 年には陶芸も始め、翌年に六代目の長女と結婚し、清水家の養子となる。1952 年 30 歳で大学を卒業した後、1966 年まで日展への出品を続ける。その間、北斗賞を 3 回、特選を 2 回獲得し、1963 年に京都市立美術大学陶磁器専攻の助教授となっている。ところが、順調に陶芸家としてのキャリアを積み重ねていた 1966 年、彫刻家への転向を模索し始める。1968 年には、初めて清水九兵衛の名で彫刻の個展を開いた。1969 年イタリアへ留学し、翌年帰国。1971 年には京都市立美大の教授を退職し、金属（主にアルミニウム）彫刻の道を邁進することになる。今回紹介する「清六陶苑 本社」の竣工が、ちょうどこの頃である。その後、大きな賞を次々と獲得するが、主なものとして「東京国立近代美術館賞」（1975）、「毎日芸術賞」（1976）、「日本芸術大賞」（1977）、「吉田五十八賞」（1985）などがある。彫刻家としての才能を遺憾なく発揮していたこの頃、1980 年に六代目が急逝し、翌年七代清水六兵衛を襲名する。その後は再び陶芸の道も歩み始め、土と金属の両方の素材に精通した芸術家となった。ちなみに、JR 京都駅の大きな長い階段のある吹き抜けに「朱甲舞」という作品が設置されている[1]。

「清六陶苑 本社」の敷地は清水寺に程近い東山五条の交差点からやや西へいったところにある。山科から車で１号線（五条通り）を京都方面に向かい、高架を降り切る手前左側にこの建物がある。五条通りから見えるのは北側で、その外観は少し光沢のある白いタイルで覆われており、2 つの直方体を組み合わせたような形状をしている。北側の窓は上の方に 1 カ所あるだけで階数が分からず、建物というよりも抽象的な白い箱のように見え

る。西側から見ると黒い外部階段が取り付いており、外壁の形態的な工夫によって階段が外壁に包み込まれるようにデザインされ、同時に白いヴォリュームを持った建物の切断面が強調されている（写真 1）。西側の外観から、低い部分は 4 階建てであり、高い方の塔屋部分には機械室が設けられていることが想像される。屋上東端には三角形の断面をしたトップライトが見える（写真 1、3）。防音上閉鎖的にならざるを得なかった北側に比べ、南側の外観は開放的である。2、3 階部分には外部テラスが西側まで廻されており、テラスに沿って横長の連続窓が設けられている。4 階にも一部屋上があり、大きな開口部が空けられている。機能は 1 階がショールーム、事務室、資材や釉薬の置き場など、2 階は南側の窓に沿ってろくろが数台置かれた工房となっている。3 階は絵付けを行なうためのスペースで、2 階とほぼ同じ間取りである。最上階の 4 階には屋上へ上がる外部テラスとアトリエ（写真 2）がある。外部から見えたトップライトが天井の高いアトリエの上部に設置されており、北側から安定した採光が得られるように設計してある。また、北側唯一の窓は西側に設置されたエレベーターとこのアトリエを繋ぐ廊下に設けられたものなのだが、窓ガラスの位置をもう少し部屋内に引き込むことで、外から見

写真 2：最上階にあるアトリエ。左側上部にトップライトがある。（写真：筆者撮影）

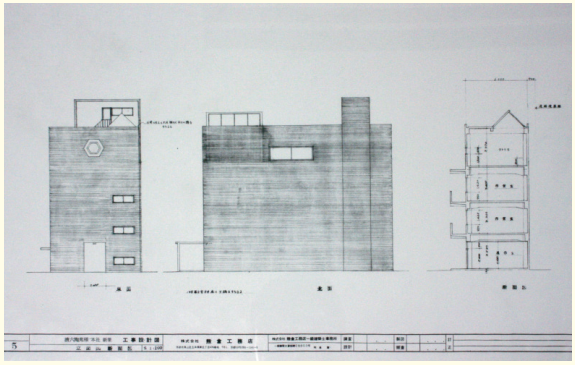


写真 3：今回の調査で確認した立面図・断面図。最上階にトップライトがある。（図面提供：株式会社熊倉工務店）

たときの陰影が濃く彫りの深い表情にしたかったそうである[2]。

七代目は偉大な歴代のプレッシャーや自身が京都人ではないといった疎外感の中で新しいものを創造するという課題に挑戦していたのだろう。「（前略）そういう中で何か、自分の安らぎを求めるとすれば、それは、京都に見られる黒い屋根瓦の連なりだったと、そう思うんですよ。日本の空間の中で、決定的に美しいと思ってしまって。（中略）それは、やっぱり、質感からきているんだと思うんです。私が質感にものすごく興味を抱きはじめる元も、屋根瓦にあったと言っていいかもしれません」と語っている[3]。七代清水六兵衛氏の言葉や作品を見ていると、京都の伝統や日本人の美意識とモダニズムの合理性や素材のもつ美しさに共通点を見出していたのではないかと感じられ、そういったものが建築にも滲み出ているように思われる。

1 この辺りの内容は、井上隆生・芳賀倫子　構成・執筆、『NHK やきもの探訪　第 2 巻』1999、pp.125 ～ 158 による。
2 筆者が八代清水六兵衛先生へのインタビューで伺ったエピソードである。当代は 2000 年に八代清水六兵衛を襲名され、現在は京都造形芸術大学の教授である。当代も早稲田大学の建築学科を卒業されており、作品は都会的・建築的であると評されている。
3 七代清水六兵衛 「やきものとは土との対話」、前掲書、p.154。

学生の発想×プロフェッショナルの技＝新スイーツ「山科ぶどうタルト」誕生！

若者と老舗のコラボレーションで、山科の魅力を発信する

ゲスト
亀丸 秀之 Kamemaru, Hideyuki
「スイス菓子 ローヌ」オーナー、
オーストリアウィーン国家マイスター、ドイツ国家マイスター

聞き手
木下 達文 Kinoshita, Tatsufumi
本学現代ビジネス学部准教授

対談風景

Interview

ケーキはあこがれ！
―50年前、洋菓子界に入った頃

木下　山科の「スイス菓子　ローヌ」といえば、ふわふわのチーズケーキが連想されるほどで、長年、地元のみなさんに親しまれています。

亀丸　ありがとうございます。おかげさまで、山科で店を開いて45年近くになります。当店のお菓子を愛してくださるお客様にお礼を申し上げたい気持ちでいっぱいです。

木下　亀丸さんは山科のご出身ですか。

亀丸　いいえ、熊本県の玉名市という、温泉で有名な町の生まれです。農業と漁業の町で、私の実家も農家でした。私は長男ですので、普通ならば農業を継ぐところですが、1年ぐらいは外の世界に出てみようということで、神戸のユーハイム（現・神戸スイーツポート）という洋菓子の会社に就職しました。1962年のことです。

木下　なぜ製菓業界に？

亀丸　ケーキは、いまでこそ日常的に食卓に上るようになりましたが、あの頃はクリスマスか誕生日に買ってもらえるのが楽しみというぐらい、本当に憧れの食べものだったんです（笑）。それと、技術を身につけることができるという理由もありましたね。それで製菓会社に入ることにしたわけです。

　ところが、ユーハイムという会社は、技術力が高く、就職先としても人気がありましたので、高度成長期に向かう60年代の、大変な人手不足の時代だったにもかかわらず、なかなか欠員が出なくて、実際に入社できたのは半年後でした。

木下　その頃に学んで、いまでも大切にしていることはありますか？

亀丸　「まがりものは決して使わない」ということを、神戸時代の師匠から繰り返し教えこまれました。たとえ

亀丸 秀之
1942年、熊本生まれ。神戸ユーハイムコンフェクト、新大阪ホテル勤務を経て、
1968年に京都・山科にローヌ洋菓子店をオープンする。その後渡欧し、
オーストリアとドイツの国家マイスターを取得し、ドイツ・デュッセルドルフにも支店を構えていた。
1998年にはウィーンケーキシルバー賞を受賞。
また、2010年12月にはNHK「鑑賞マニュアル美の壺」（BSプレミアム）で、ローヌの商品が紹介された。
著書にはP.ミラウツとの共著でまとめられた『マジパン』（柴田書店、1994年）がある。

ば私は、コストが高くついても生乳100%のフレッシュバターを使います。原材料を厳選して、本物を使うという姿勢は、神戸時代に教えられたとおり、いまも大事にしています。

ヨーロッパ伝統の製菓技術をきわめて、国家マイスターに

木下　ヨーロッパでも製菓業に携わり、ドイツとオーストリアで国家マイスターの資格を取得されました。この資格を持つ人は、日本人では数少ないといわれています。
亀丸　マイスターになるには最短でも9年かかるといわれていますので、取れたときは本当にうれしかったですね。
木下　なぜヨーロッパに渡ろうと思ったのですか？
亀丸　ユーハイムで3年働いた後、大阪のホテルの厨房で洋食部門や製菓部門を担当することになりました。洋食やデザートとなると、やはりヨーロッパがいちばん長い伝統があるので、どうせなら本場で勉強したいと思って、まずスイスに行ったわけです。

スイスで少し修業した後、帰国して、1968年に山科で「スイス菓子　ローヌ」を開店したのですが、もっと本格的に修業すべきだと思って、ウィーンに行きました。

というのは、日本の製菓業界では、「視察ツアー」と称して2週間程度のヨーロッパ旅行をしていて、それに参加しただけで「ヨーロッパで修業してきた」と宣伝する同業者が多かったんですね。現地の製菓学校での研修は正味1週間程度なのに、ですよ。それでは「看板に偽りあり」ではないか。修業したというからには、もっとちゃんと勉強したい。そういう思いから、だんだんヨーロッパでの本格的な修業を考えるようになりました。

実際に渡欧したのは1978年です。山科の店を運営しつつ、ウィーンで製菓学校に通ったり、製菓業界で働いたりして、86年にオーストリアウィーン国家マイスターの資格を取ることができました。もちろん、製菓学校の授業はすべてドイツ語ですから、最初はちんぷんかんぷんでしたが（笑）。

マイスターになるとすぐ、ドイツに店を出さないかという話が来て、88年にデュッセルドルフに出店し、その翌年にはドイツの国家マイスター資格も取得しました。そんな調子で約13年間、日本とヨーロッパを往復しました。
木下　食文化という点で、ヨーロッパと日本の違いは？
亀丸　果物に限っていえば、日本では、四季折々、さまざまな果物が実るので、旬のものを新鮮なうちに楽しむことができますが、ヨーロッパの場合、特に冬の間は、収穫できるものが少ないので、加工・貯蔵して食べるというスタイルが定着しているように思います。

たとえばブドウは、日本では90%が生の状態で使われますが、ヨーロッパでは貯蔵しておいて、ワインだけでなく、お菓子などにも使います。

また、ドイツの「黒い森」と呼ばれる地方では、サワーチェリーがたくさん実ります。完熟したサワーチェリーは、道端に落ちて、路面を真っ黒に染めるぐらいですから、それを蜜漬けで保存して、ケーキに焼き込むんです。そのケーキは、いまでも黒い森地方の名物になっていますよ。

山科との出会い
—「スイス菓子　ローヌ」の誕生

木下　熊本出身の亀丸さんが、なぜ山科で開業しようと考えたのですか。
亀丸　そろそろ独立をと考え始めたとき、ある人から「京都の山科は、人口のわりに洋菓子店が多くて、しか

も、よく売れている」と言われたんです。それでさっそく下見に来てみると、JR山科駅前に洋菓子のチェーン店が3つもあって、さらに個人経営の小さなお店もあるんですね。「こんなにケーキが売れる土地なのか」とびっくりして、山科でお店を開くことを決心しました。それが現在、山科三条街道商店会の会長を務めておられる龍野さんの酒店の隣です。その後、駅前再開発事業などを経て、現在地に移転しました。

木下　開業した68年当時、山科はどんなまちでしたか。

亀丸　とにかく田んぼが広がっていた、という印象ですね。いま駅前に立つと、ビルやマンションなど高い建物が並んでいますが、44年前は紡績工場と倉庫と田んぼだけでしたから、東海道新幹線が見渡せたんです。こんなに開けるなんて、あの頃は思いもしないことでした。

木下　山科三条街道商店会は、まちの振興と商店街の活性化に熱心に取り組んでいます。

亀丸　特に若手の人たちが頑張っていますね。彼らは、行政や産業界など、いろいろな人たちと協力して、山科地域商業ビジョン推進委員会という組織を立ち上げ、山科の特産品である「山科なすび」をモデルに「もてなすくん」というキャラクターをつくったり、観光マップ制作やイベントの開催などに取り組んでいます。

当店も、その一環として、山科なすびを生地に練り込んだ「山科なすびサブレ」を商品化しました。山科なすびは、山科にしかない固有種で、他のナスに比べて格段においしいんです。水分の多い野菜なので商品化の過程では苦労しましたが、いまでは当店の定番の焼き菓子になっています。

若者の発想×プロフェッショナルの技＝「山科ぶどうタルト」の誕生

木下　今夏、「山科特産のブドウでタルトをつくったら、どんなスイーツができるだろう」という本学学生の発想が、お菓子づくりのプロフェッショナル－亀丸さんの力と結びついて、「山科ぶどうタルト」というかたちになりました。

亀丸　このプロジェクトはおもしろかったですね。ほぼ1年がかりの共同作業で、試作・試食を何度も繰り返しました。その間、かなり厳しいアドバイスもさせていただきましたが、若い人たちと一緒に考えることで、私自身も大いに刺激を受けました。

木下　ありがとうございます。「ぜひローヌさんとコラボレーションしたい」という学生たちの熱い想いが実ったわけですが、結果的にも、とても貴重な学びの場になりました。

山科ぶどうタルト完成品（左：ゼリータイプ　右：ムースタイプ）

ブドウが山科を代表する農産物であることは、区内の方々はよくご存じですが、区外ではあまり知られていません。山科のブドウの認知度をもっと高めるとともに、ブドウを通じて山科をアピールできないかと考えたのが、今回の商品開発の動機です。そこで、タルトの開発と並行して、「山科ぶどうマップ」も制作しました。

亀丸　こうしてマップにしてみると、いかに山科のブドウ栽培が盛んかが、とてもよくわかりますね。たしかに山科では、昔からいろいろな品種のブドウが栽培されてきました。直売所も多いし、地元の子どもたちは農園へブドウ狩りに行くのが年間行事になっています。

私も山科産のブドウをよく食べますが、特に「瀬戸ジャイアンツ」などは、皮ごと食べることができて、最高においしい（笑）。ですから、学生さんが山科のブドウに着目して、タルトと組み合わせようと考えたのは、なかなか鋭い感性だと思います。

「山科ぶどうタルト」が世に出るまで—開発の裏舞台で

木下　タルトひとつ開発するにも、プレートやピックなど、タルト本体のトッピング資材、タルトを載せるカップ、商品について解説したメッセージカード、鮮度保持剤、箱・包装紙・シール・リボンといったパッケージ資

材等々、さまざまなアイテムが必要になり、そのたびに学生たちは検討を重ねました。新商品の開発がいかに難しいか、あらためて実感したことだろうと思います。

亀丸　ひとつの商品をずっと続けて販売するためには、個人で楽しむ菓子づくりとは違って、そうした細々した資材のコストも無視できませんから、そういうことも知ってもらえたとしたら、私としても取り組んだ甲斐があります。

木下　学生たちは、このプロジェクトの経過をまとめたプロモーション映像も制作しました。

亀丸　私も拝見しましたが、なかなか初々しくて、よかったですよ（笑）。専門のプロダクションに頼んだら、もっとスマートにできたかもしれませんが、それでは学生さんの生き生きした感じが出ません。さぞ苦労も多かったでしょうが、自分たちの手でつくられたという点にいちばんの意義があると思います。

たぶん、その甲斐あってのことだと思いますが、多くの新聞やテレビも「山科ぶどうタルト」を取り上げてくださいましたね。みなさんの熱意が伝わったのだと思います。

来年も「山科ぶどうタルト」を！

木下　さて、肝心の「山科ぶどうタルト」の評判はどうでしたか。

亀丸　とても好評で、何度も買いに来てくださるリピーターさんが続出しました。今年のブドウの収穫が終わって、タルトの販売も終了しましたが、リピーターさんにそれを申し上げると、「もう終わったの？」とがっかりなさる。そういう光景が何度もありました。

木下　ターゲットとして想定した客層は20代の女性でしたが、実際の反応は？

亀丸　お買い上げが最も多かったのは30～40代の方だと思います。もともと、うちのお客様の年齢層がその辺りですから。20代の方向けの企画なら、1個350円という価格設定は高すぎたかもしれませんし、デコレーションももっと華やかにする必要があるでしょうね。

木下　自分たちのつくりたいものをカタチにするだけでなく、そのお店の顧客層に合わせた商品開発も重要だということですね。

そうした課題も含めて、地域の方々との連携をよりいっそう強めるために、本学は地域政策・社会連携推進センターを設置しました。このセンターを中心にして、これからも地域の方々との連携を重ねていきたいと考えています。

亀丸　企業としても、立地する地域が元気でなければ存続できませんので、まちの活性化につながることには、できるだけ協力したいと思っています。

それで思うのですが、陶灯路をはじめとしたイベントは、プログラムの終了と同時に人の流れや動きも消えていないでしょうか。それでは、もったいない。せっかく多大な労力をかけたイベントですから、今後は、時間的にも空間的にも、まち全体ににぎわいをもたらすような仕掛けがあればと思います。持続的に開催するには、それなりの効果が必要ですからね。

いずれにせよ、私は子どもたちや若い人たちに教えることが大好きで、デュッセルドルフでも、山科でも、子どもたちの体験学習を積極的に受け入れてきましたから、今回、熱心な学生さんたちとコラボレーションできたことは、大変うれしいことでした。

木下　では、来年も「山科ぶどうタルト」の販売を？

亀丸　もちろんです！　地元のブドウ生産者の方々から「来年も頑張って作るで！」と意欲満々の声をいただいているので、すでに私の腕も大きく鳴っています（笑）。（了）

マイスターのライセンスと店長のイラスト

地域連携における相互メリットについて

京都橘大学現代ビジネス学部現代マネジメント学科の木下ゼミでは「サブゼミナール」と称して、学生が自らテーマを決めて研究実践を行なうプログラムを毎年実施している。現４回生のテーマは、「地域の特産品を使った洋菓子の開発とそのプロモーション」を行ないたいとのことで、まる２年の歳月をかけて「山科ぶどうタルト」を完成させた。制作に当たっては、大学の立地する京都市山科区内にある洋菓子店「ローヌ」と連携することができた。2012 年８月９日に完成発表会を学内で行ない、８月 11 日から発売となった。

なぜ、こうした事業が発足したかというと、まずゼミ生の意識としては、京都の大学に通いそこで勉強はしてはいても、なかなか直に京都の文化に触れることがないという課題があった。その中でも「スイーツ（菓子）」を中核的素材として取り上げた。とくに、これまでの「京都菓子＝八つ橋」という固定概念からはなれ、京都の洋菓子に着目し、地元山科の特産物としての「ぶどう」を使用することが企画されたのである。京都の土産菓子は多くあれど、山科地域のそれがほとんどなかったという理由もあった。

そして、山科のぶどうを使ったタルトの開発をローヌの技術指導の下、具体的な試作づくりがスタートし、幾度かの試作と試食を繰り返しながら商品のクオリティーを高める研究を重ね、最終的に「ぶどうゼリータイプ」と「カシスムースタイプ」の２種類のタルトが世に出された。一方、プロモーションとしての活動は京都の映像プロダクションと連携し、シナリオづくりから、編集作業に至るまで指導をいただきながら、最終的に７分間のプロモーション映像をつくり上げることができた。

教育的な視点からこうした産学連携事業ということを考えるならば、単なる京都の菓子文化を学ぶだけでなく、実践的な商品開発や映像制作の手法を身につけることができるとともに、質的向上を図る非常にセンシティブなビジネス経験を積むことができる。加えて、プロジェクトを通じて、総合的な組織マネジメント能力やコミュニケーション能力（リーダーシップ、責任感、協調力、取材力、交渉力、表現力、行動力等）を磨くことも可能となる。他方、地域的な視点に立てば、地域の特産物を単一商品ということだけでなく、加工品という複合的・異質的要素を通じてクローズアップすることができ、それらが相互的に絡み合いながら、最終的に地域ブランドそのものを向上させる契機ともなる。

ただ、こうした事業は連携する人や組織の理解なしには実現することは難しいことであり、今回は亀丸店長をはじめ、多くの人たちの理解と協力があって成り立っていた。教員側としては、事業の目的と相互のメリットを明確にし、偏ることなく調整していくのが役目なのではないかと経験的に感じた次第である。　（木下達文）

つながる Vol. 1（2012 年 12 月 20 日）
発行：京都橘大学　地域政策・社会連携推進センター
〒607-8175 京都市山科区大宅山田町 34
Telephone: 075-574-4186　Facsimile: 075-574-4149
http://www.tachibana-u.ac.jpo　E-mail: icps@tachibana-u.ac.jp

京都橘大学
地域政策・社会連携推進センター
Center for Regional Policy and the Promotion of External Relations
KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY